

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏 名

権 裕羅

論 文 題 目

現代日本語の形容詞の分類
—構文における振る舞いを基準にして—

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 杉村 泰

委員 名古屋大学教授 宮地 朝子

委員 名古屋大学准教授 志波 彩子

委員 名古屋大学准教授 李 澤熊

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本研究は現代日本語の形容詞について、構文的な振る舞いの違いを見ることにより、感情度の高いものから属性度の高いものまで①「憎い」類、②「嬉しい」類、③「寂しい」類、④「熱い」類、⑤「危ない」類、⑥「少ない」類、⑦「赤い」類の7つに分類されることを主張するとともに、形容詞分類のための客観的な指標を提示したものである。論文は全7章で構成されている。

第1章では、本研究で考察の対象とする形容詞275語とその選定方法について示し、客観的な基準を使って形容詞を分類することを主張し、次の4つの指標を用いることを述べている。

- ・「～てならない」「～てたまらない」「～てしかたがない」構文との共起
- ・他動詞構文「XガYヲ～クスル」、使役構文「XガYヲ～クサセル」との共起
- ・比較構文「XガYヨリ～い」との共起
- ・程度副詞「非常に」「とても」「なかなか」「大変」「かなり」「ずいぶん」「相当」「だいぶ」「ちょっと」「少し」「やや」との共起

第2章では、形容詞の分類に関する先行研究を概観し、先行研究における形容詞分類の基準や分類結果を検討している。その上で、本研究における分類指標を提示し、これにより形容詞は大きく7つに分類できることを述べている。

第3章では、形容詞と「～てならない」「～てたまらない」「～てしかたがない」構文との共起について論じている。従来、これら3つの表現は感情・感覚を表す動詞・形容詞が付いて、その程度が甚だしいことを表すものであることが指摘されているが、形容詞の分類指標としてはあまり有効に活用されてこなかった。これに対し、本研究では、これらを形容詞の分類指標として利用し、次の表のように形容詞を大きく4つに分類できることを指摘している。

	①「憎い」類	②「嬉しい」類	③「寂しい」類	④「熱い」類	⑤「危ない」類	⑥「少ない」類	⑦「赤い」類
～てならない	○	○	○	×	×	×	×
～てたまらない	○	○	○	○	△	×	×
～てしかたがない	○	○	○	○	○	△	×

第4章では、形容詞と他動詞構文「XガYヲ～クスル」、使役構文「XガYヲ～クサセル」との共起について論じ、各構文にいかなる形容詞が使われるか、ヲ格名詞句に現れる語が「有情物」「心」「カラダ」「コト」「モノ」のうちどれになるかを見ることにより、次の表のように形容詞を大きく6つに分類できることを指摘している。

		感情			感覚	評価	属性	
		①「憎い」類	②「嬉しい」類	③「寂しい」類	④「熱い」類	⑤「危ない」類	⑥「少ない」類	⑦「赤い」類
スル	有情物	×	×	○	○	○	○	○
	有情物 心	×	△	○	○	○	○	×

論文審査の結果の要旨

	の部分	カラダ	×	×	×	○	○	○	○
	非情物	コト	×	×	○	○	○	○	○
		モノ	×	×	×	○	○	○	○
サセル	有情物		×	○	○	○	○	○	×
	有情物の部分	心	×	○	○	○	○	○	×
		カラダ	×	×	×	○	○	○	○
	非情物	コト	×	×	○	○	○	○	○
		モノ	×	×	×	○	△	△	×

第5章では、形容詞と比較構文「XガYヨリ～い」との共起について論じ、X、Yが「人」「モノ」「コト」のどの場合に成立するかを見ることにより、形容詞を大きく4つに分類できることを指摘している。

第6章では、形容詞と11語の程度副詞「非常に」「とても」「なかなか」「大変」「かなり」「ずいぶん」「相当」「だいぶ」「ちょっと」「少し」「やや」との共起について論じ、形容詞を大きく4つに分類できることを指摘している。

最後に第7章では、第3章から第6章までの考察をまとめ、それぞれの指標によって分類した形容詞を合わせると、形容詞275語が大きく分けて、感情度の高いものから属性度の高いものまで①「憎い」類、②「嬉しい」類、③「寂しい」類、④「熱い」類、⑤「危ない」類、⑥「少ない」類、⑦「赤い」類の順に並んでいることを指摘している。

【本論文の評価】

本研究は、従来恣意的になりがちであった形容詞分類を「～てならない／たまらない／しかたがない」構文との共起、他動詞構文・使役構文との共起、比較構文との共起、程度副詞11語との共起という客観的な基準を用いることにより、形容詞を大きく7つに分類した点で、日本語の形容詞の体系化に貢献する優れた研究である。また、これまで個別に議論されてきた各構文の間に一定の関係があることを示唆している点で、日本語の構文研究にも寄与する研究となっている。さらに、コーパスを使って275語の形容詞の構文的特徴を丹念に調べ上げた点も高く評価できる。本研究は単なる形容詞の分類にとどまらず、形容詞分類の新たな手法を提示し、さらには日本語の構文研究の進展にも貢献するものであり、先行研究の記述を十分に超えたものである。

その一方で、形容詞の構文的な特徴に議論が集中し、「暖かい」と「温かい」のような多義の違いなど意味的な問題が取り残されたままになっている。また、本研究では7つの形容詞の類を一次元的に並べているが、必ずしもそれだけで説明できない面もあり、多次元的に捉える必要があることも指摘された。各構文間の関係について踏み込んだ議論があるとよかったという意見も付された。しかし、その点を考慮しても本研究は先行研究を十分に超えるものであり、審査委員全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。